

# 口頭発表「学年飼育に関する児童の声と鳥への認識調査結果から」

西 勝海



## 1 はじめに

セキセイインコは1羽でのケージ飼育もできるし、家禽舎のような大型ケージで多くの羽数を飼うこともできる。単独で飼って手乗りにしたり、産卵から成鳥になるまでの過程も観察できる。また、その他のインコの行動や習性など様々なことが観察でき、自然科学的な思考を育てる観点からもよい教材であると考えられる。

子どもたちの学力低下問題が問われている。今日の学力問題は、学習状況を点数化しやすい教科学習に視点が行き、学校教育のもう一つの特徴である特別活動などの軽視につながっているのではないだろうか。

本校では、セキセイインコを飼育する活動を4年前から3年生の『学年飼育』に位置付けて実施している。4年生になるとニワトリの飼育活動になる。生活科の実践から始まったニワトリの飼育を4年生の学年飼育に位置づけようとする論議から、3年生ではセキセイインコの飼育を位置づけることになったものである。

ここで私は、セキセイインコの飼育を教材として生かす視点の研究が必要であろうと考える。また、総合的な学習の時間の題材にもなるのではないだろうか。この活動は、子供と教師がセキセイインコの飼育を介在にして、会話のキャッチボールをする機会の発生が期待できる。

## 2 「セキセイインコ」の飼育活動から得られた調査

### (1) 比較調査

実際に飼育活動に当たっている本校の3年

生の子どもたちと、学校内でセキセイインコを身近に見ているが実際の飼育活動はしていない厚木市立E小学校の児童を対象に、鳥についての認識を調べるために、アンケートによる次のような調査を実施し比較した。

- ・1年間当番活動をした子どもの感想調査
- ・「鳥類への知見」調査
- ・鳥に関しての認識・理解調査

### (2) 飼育活動の感想調査

平成18年3月、1年間の飼育当番活動を終えた3年生の子どもたち91人にアンケート記入方式で調査を実施した。その結果を①「よかったこと」の感想を分類し図1に示した。最も高い数値を示したのは、清掃・ふれあいの35人であった。羽のきれいさに関すること7人に比べても5倍近い数字である。また、児童は、えさや水を与えた行為にインコが反応したことをよかったと感じている。インコとの直接的な関わりであることから清掃・ふれあいに含めてもよいと考えられる。羽がきれいの項目よりも、やはり鳥との関わり及び反応があることが児童には喜びになることが分かる。これは、見ただけのものより自分が行動してインコと関わり合ったことの方が強く印象に残っているということであろう。子どもは、インコの世話ができたことの直接体験を喜ぶことが伺える。級友の項目では、班の仲間の協力を具体的な姿で捉えられた言葉が見られた。自分の項目ではインコについて新たなことを知った喜びや自分自身の前向きな向上心を言葉にできていた。

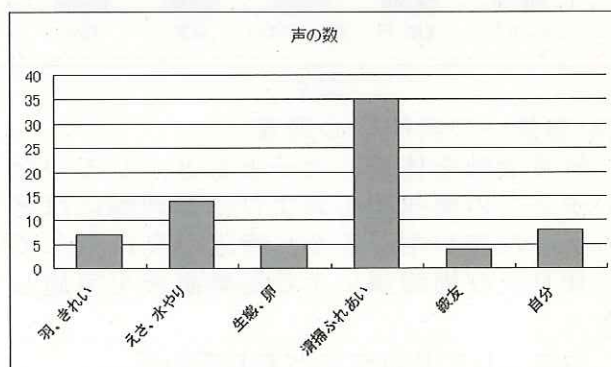


図1

## ②「いやだったこと」

次に「いやだったこと」の感想を図2にまとめた。ここでは、ふん・においに関することが最も高くなった。また、清掃・ふれあいが高い数値を示した。よかったこと同様に関連する行為になるので一緒に考えてよいと考えられる。フン・においはいやだけど、やらなくてはならないという克己心の育成につながる。檻の中で飼育されているセキセイインコと自分たち『人』との関わりを考えさせるよい教育題材といえる。

教師は、子どもたちの活動を後押しするため世話がしやすい道具や時間や班などの体制を考える必要がある。世話活動がよかったと思うように、児童との言葉のキャッチボールが大事になる。

『死』に関することに関心を寄せた子どもが13人もあった。全体の21%である。セキセイインコが寒さのためか多く死んでしまった。教師にとって『死』は設定した機会ではないけれど、生命尊重教育の好機と捉えることが重要になる。級友の項目は、班の仲間でのトラブルである。いたずらやさぼりなどがあった時、責任感の育成の場となる。自分の項目では、アレルギーがあるとか鳥類が好きになれないといった言葉もあった。

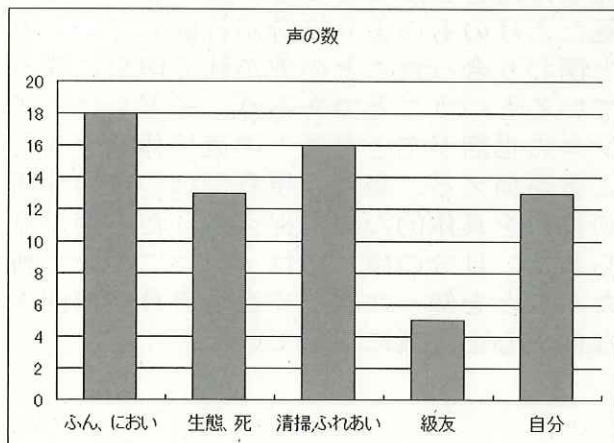


図2

### (3) 鳥類への興味関心調査

飼育活動を体験した子どもと、していない子どもの興味関心および知識理解にはどのような差が生じるか、身近な鳥に関しての知見及び描画法による認識調査を実施した。

指標とした鳥は次のとおりである。

スズメ メジロ カラス ヒヨドリ  
ブンチョウ セキセイインコ ハト ウズラ  
チャボ ニワトリ

#### ①知見の調査

この調査から図3の結果を得た。『見たことがある鳥』の答え率は明らかに本校の子どもが高かった。実際に飼育活動に関わっているセキセイインコは当然の数字と思われるが、メジロ、ヒヨドリといった野鳥にも関心が向いていることがわかる。普段なじみのないと思われるチャボ、ウズラでは知見について大きな差が見られた。比率から見ると、2～3倍の開きになっている。飼育活動を体験している児童は野鳥などの名前も知っているのである。このことは学校での飼育活動が、子どもたちの日常生活に影響を及ぼしているということが伺える。

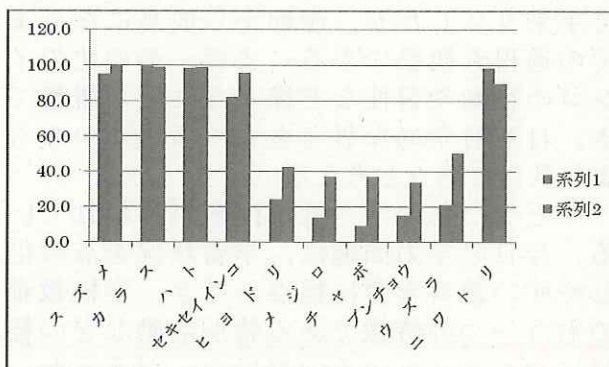


図3

#### ②描画法による調査

セキセイインコについて既得の知識で描いてもらうことにした。鳥の体や動きに関する描画表現を、目、くちばし、羽根などの部位ごとに、「描いていない、描いているが抽象的、インコの特徴をよく捉えて描いている」の3つに分けて点数化した。くちばしの絵でも上と下に分かれて描く、上の方が曲がっていることをとらえているなど差が見られた。また、かつて話題になった4本足の鳥の絵があったことには改めて驚いた。児童の認識は実物を見ないでも得られるのである。

描画法による調査の集計結果は図4の通りだった。本校の子どもの方が、高得点のところに分布していることがわかった。9点以上の獲得が全体10%になっている。一方、E小学校の子どもは、高得点部には全く獲得がなかった。また、本校の子供につ

いては、高得点部と中間点部に大きな山が2つに分かれて見られる。一方、E小学校の子供は中間点部に一つの山になっている。飼育活動をしている本校の子どもは飼育体験の直接の活動を通して知識が得られたと言える。このことから、飼育活動の直接体験によりセキセイインコを具体的に見る目が養われることがわかる。小学生時代における知識獲得は、実際活動による体験の大切なことが推察できる。

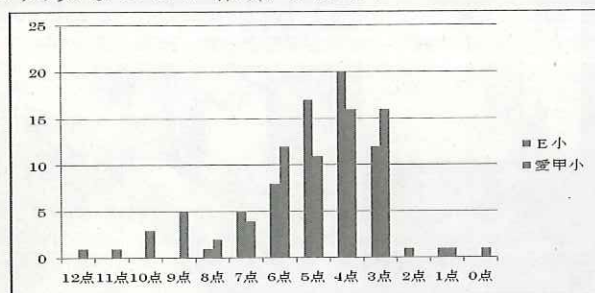


図4

### 3 本地区（厚木愛甲地区）の飼育活動の実際

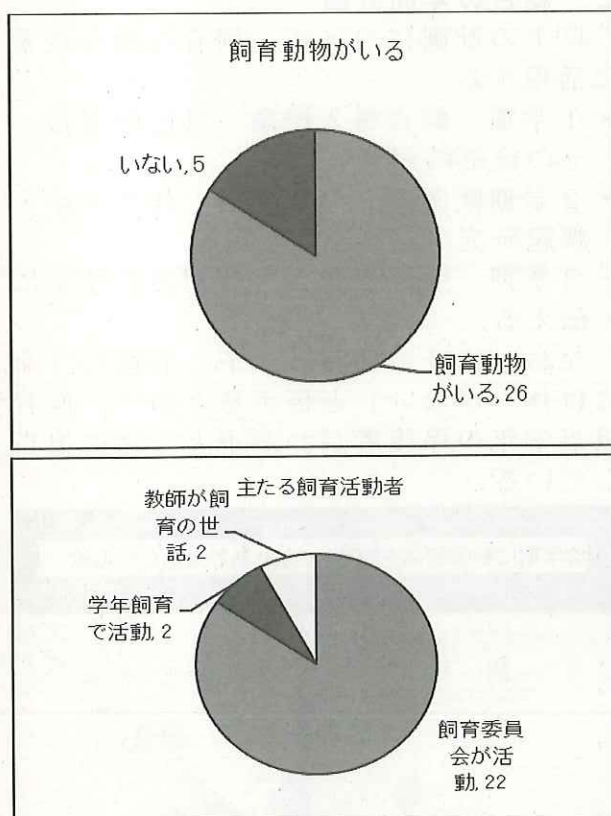


図5

小学校の動物飼育状況を神奈川県厚木愛甲地区の調査から見てみると、図5の通りであった。動物を飼育している学校数は、31校中26校であり全体の84%である。その内訳を見ると、特別活動の形をとっている学校が22校、教師が飼育の世話をしている2校、新しい飼育形態である「学年飼育」が2校であった。この学年飼育は、どの子にも動物飼育を体験させることができ、総合的な学習の時間の題材にもできると考える。

### 4 まとめ

学校動物飼育は、子どもの飼育体験があつてこそその価値は生まれる。学校の教師は常に正確な理解を求め適切な飼育環境をつくらなければならない。小学校の動物飼育は、長く特別活動のひとつと考えられてきた。一部の子どもが、委員会活動として世話することを通して協力や責任感を養うとされてきた。

しかし、私は共生を知るといった自他の生命尊重の教育をどの子にも与えたいと考える。ここに小学校において動物を飼育するねらいがあるのではないだろうか。子どもと共に動物を介在にした会話のキャッチボールが展開できる。

教師は、動物飼育に関わる一番の当事者であり、かつ推進すべき立場にある。教師は動物を子どもの育ちに教材として生かすことを考えるべきである。

小学校の教育を考えると、動物の飼育が単に情操教育に役立つといったような抽象的認識ではなく、具体的に教育課程と関連した科学として捉えられていけば、その有効性の追究意識から学校動物飼育に関わる課題解決もできると考える。

(厚木市立愛甲小学校教諭)